〔千葉医学　93：273 ～ 276，2017〕

〔学会〕　第1356回　千　葉　医　学　会　例　会
第 36 回　千葉泌尿器科同門会学術集会

日　時：平成29年１月28日（土）　13：00～
場　所：三井ガーデンホテル千葉　４階「天平」

１．ゲムシタビン・シスプラチン療法による術前化学療法を施行した浸潤性膀胱癌症例の検討

梨井隼菱（千葉県がんセンター）

【目的】浸潤性膀胱癌に対しGC療法による化学療法を施行し膀胱全摘術を行った症例につき検討した。
【対象】2009年４月から2014年９月の間にこの治療を施行した63例を対象とした。
【結果】病理標本でのpT0は18例（28.6％），pT2＞は25例（39.7％）であった。３年全生存率は65.0％であった。
【考察】GC療法による術前化学療法は比較的忍容性よく施行できる治療であり，有用性が示唆された。

２．術前化学療法としてGC療法を施行し，著効を認めた膀胱尿路上皮癌micropapillary variantの１例

金　尚志，木藤宏樹，夏山隆夫
松崎香奈子，塩見　誉，井上雅文
赤倉功一郎
（JCHO東京新宿メディカルセンター）

71歳男性。肉眼的血尿。頻尿を主訴に受診。膀胱鏡にて乳頭型広基性腫瘍認めた。TUR-Bt施行し，尿路上皮癌Micropapillary variantが検出された。全身検索にて遠隔転移は指摘されなかったが腫瘍の腹壁への浸潤認め，臨床病期はcT4bN0M0。術前化学療法が奏功し，手術可能となった。手術検体には癌細胞検出されず，完全寛解と判定した。

３．BCG膀胱内注入後に発生したReiter症候群の２例

安藤敬佑（船橋市立医療センター）

BCGの重大な副作用としてReiter症候群がある。３徴（関節炎，結膜炎，尿道炎）や診断基準を一部しか満たさない症例（不完全Reiter症候群）も多く，臨床の場で診断に至っていない症例も多いと予想される。早期診断・治療が患者のQOLを左右する為，不完全型をいかに診断するかが重要である。当院で経験した２症例について提示し，若干の文献的考察を含め報告する。

４．膀胱原発mucosa-associated lymphoid tissue（MALT）リンパ腫の１例

馬場晴喜，吉田一樹，細木　茂
大木健正　　（成田赤十字）

症例は77歳女性，両側水腎症と多発性の粘膜下腫瘍が疑われ当科紹介となる。CTにて両側とも膀胱近傍までの尿管拡張，及び膀胱壁の肥厚を認めた。TUR-BTを施行し，病理組織診断はMALTリンパ腫であった。CTにて他臓器に異常を認めずまた骨髄生検でも異常を認めなかったため膀胱原発のMALTリンパ腫と診断した。放射線治療を行い，現在両側水腎症は消失し他臓器再発も認めていない。膀胱原発のMALTリンパ腫は比較的稀な疾患であり，若干の文献的考察を加え報告する。

５．腹腔鏡下腎部分切除術におけるMayo Adhesive Probability scoreの有用性の検討

金坂学斗（帝京大ちば総合医療センター）

腎部分切除術においてMayo Adhesive Probability（MAP）scoreがAdherent Perinephric Fatを予測すると近年報告されている。今回，当院において腹腔鏡下腎部分切除術を施行した87例を対象に，MAP scoreが手術時間，出血量，術後腎機能に及ぼす影響について後方視的に検討した。結果は手術時間と有意な相関を認めたが，出血量や術後腎機能とは有意な相関を認めなかった。MAP scoreは術前に手術の難易度を予測し術式や治療法を選択する手段になる可能性が示唆された。

6．当院における高齢者に対する経尿道的腎・尿管結石破砕術の検討

米田　慧（東邦大医療センター佐倉）

【対象・方法】当院でTULを行った250例を，75歳未満・75歳以上に分け比較検討した。

【結果】平均年齢: 58.6歳，BMI: 14.4，Stone surface area（SSA）: 66.2㎟，平均入院期間: 7.8日，結石消失率（SFR）: 73.6％，術後合併症: 16.4％であった。入院期間とリスク数が両群で有意差を認めた（7.4日vs12.8日 p＜0.05，0.7個vs1.4個p＜0.01）。

【考察】高齢者においてもTULは有効かつ安全な治療であるが，加齢により手術リスクは増し，日常生活への復帰に時間を要することが判った。

7．経会陰前立腺生検後に発症し，腸管を温存しえた上腸間膜動脈塞栓症の1例

齋藤心平（船橋市立医療センター）

症例は77歳男性。既往に心房細動があり，ワーファリン内服中であった。近医よりPSA高値で紹介となり，1週間前からのワーファリンのヘパリン置換後に，腰椎麻酔下に経会陰前立腺生検を施行。術後2日に突然の腹痛あり。造影CTで上腸間膜動脈塞栓症の診断となった。緊急開腹手術を施行し血栓を回収した。術後22日目に独歩退院。発症早期での診断・手術により，腸管を温存できた1例であった。

8．ロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術における断端陽性予測因子の検討

竹下暢重（千葉県がんセンター）

【目的】当院でのロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術（RARP）における切除断端陽性（PSM）の予測因子に関して検討した。

【対象と方法】2011年9月から2016年5月までにRARPを施行した786例のうち神経温存例，術前ホルモン療法施行例などを除外した641例を対象としPSM予測因子を検討した。

【結果】PSM予測因子として多変量解析にて前立腺体積が小さい，前立腺生検陽性本数率，NCCNリスク分類といずれの項目も独立した予測因子であった。

9．非小細胞肺癌の化学療法中に精巣梗塞を来した1例

大塚耕太郎（千大）

症例は53歳男性。非小細胞肺がんの術後補助療法中，左陰嚢の激痛あり当科紹介受診。発熱なく，採血やエコー所見などで精巣上体炎を疑う所見なし。本人と相談のうえで疼痛コントロール目的に左精巣摘除を行った。精巣の明らかな捻転は認めなかったが割面は一部暗赤色を呈していた。術後左陰嚢部の疼痛は改善された。精巣の病理所見では，頭側で組織変化が強く小梗塞壊死像があり，精巣区域梗塞の診断となった。

10．テストステロンの低下と前立腺癌ホルモン療法

山本賢志（千大）

【背景】進行性前立腺癌（Stage≧C）症例におけるTST低下作用の予後予測因子としての有用性について検討した。

【方法】ホルモン療法のみ施行した（stage C以上）の222名の患者の全生存期間（OS）および一次治療の奏功期間（PFS）の予後因子について解析した。

【結果】OSにおいて，nadir TST 20ng/dlとTST低下480ng/dlが独立した予後予測因子であった。

【結論】nadir TST値（20ng/dl），TST低下（＞480 ng/dl）を到達するこが，さらなる予後の改善に寄与する可能性が示唆された。

11．当院におけるCRPCに対する新規内分泌治療薬の初期使用経験

加藤洋人（船橋中央）

CRPCにおける新規内分泌療法薬エンザルタミド（Enza）とアビラテロン酢酸エステル（Abi）の治療効果について検討した。2014年5月からEnzaまたはAbiを投与した13例，Enzaは8例，Abiは9例，両剤投与した例は5例であった。

【結論】PSA値の低下に関してEnzaは37.5%，Abi44.4%と両剤ともにCRPC症例に対し一定の効果が期待できると考えられた。また，両剤投与群ではAbi先行例のほうが，PSA値低下が期待できると考えられた。

12. 泌尿器癌に対するゾレドロン酸，デノスマブの使用

藤本　歩，小島聡子，金坂学斗
芳生旭辰，巣山貴仁，荒木千裕
増田　広，納谷幸男
（帝京大ちば総合医療センター）

泌尿器癌に対する骨修飾薬の使用頻度は上昇傾向であり，骨関連有害事象を減少する。一方で頻度は少ないが有害事象として顎骨壊死（ONJ）がある。当院において転移性腫瘍に対しゾレドロン酸・デノスマブを使用した164例中18例にONJを認めた。投与前に歯科受診を行った症例では発症後の増悪はなく経過している症例が多く，導入前から定期的な口腔ケアを行うことによって，より安全な使用が可能であると考える。

13. 済生会習志野病院と旭中央病院での3年間の研修

佐藤広明（旭中央）

千葉県済生会習志野病院に2014年4月～2016年3月まで在籍し，その後2016年4月～総合病院国保旭中央病院にて専門医研修中である。2施設共通の特徴として，癌，結石，救急疾患，小児手術など，幅広い臨床経験を積むことが可能である。手術症例も多数経験可能であり，両施設において，きわめて有意義な研修生活を送ることができたと考える。

14. 治療抵抗性腎癌細胞で発現低下を認めるmicroRNA-l0aの機能解析と新規機能性RNA分子ネットワークの探索

新井隆之（千大・機能ゲノム学）

治療抵抗性腎癌細胞マイクロRNA発現プロファイルから，癌抑制型マイクロRNAを探索した。その中で，治療抵抗性腎細胞癌で著明に発現低下しているmiRNA-l0aに着目した。miRNA-l0aを起点とした機能性RNAネットワークの探索から，治療抵抗性に関わる遺伝子としてSKA1を同定した。SKA1は腎細胞癌の病態に関与しており，治療の標的であると考えられた。マイクロRNAが制御する機能性RNAの探索は，TKI治療抵抗性獲得の分子メカニズムの解明に有効な研究戦略である。

15. 泌尿器がん幹細胞の制御機構の解明

滑川剛史（埼玉医大ゲノム医学研究センター・
遺伝子情報制御部門）

【背景・目的】近年，Cancer stem like cell（CSC）が，がんの発生メカニズムや治療抵抗性に関わることが報告され，がん研究において注目されるテーマとなっている。他方，がんのheterogeneityは患者特異的な治療の選択に重要であり，heterogeneityを反映するPatient-Derived Cell line（PDC）/Patient-Derived tumor Xenografts（PDX）モデルの樹立，解析は有用な手法となる。今回我々は泌尿器がんにおけPDC/PDXモデルを樹立し，診断・治療の評価ツールとして活用することを目的とした。

【方法】泌尿器がんの検体を採取し，特殊な培養でCSClikeなスフェロイド形成をした細胞を作成した。さらにこれらの細胞を免疫不全マウスへ移植した。また作成したPDCのRNAを抽出しCSCマーカーの解析をおこなった。

【結果】尿路上皮がん由来のスフェロイドを形成するPDCを2症例確立した。このうち1症例に関しては免疫不全マウスへの移植に成功した。確立したPDCにおけるNanog，SOX2の発現は膀胱がん細胞株T24と比較し上昇していた。

【考察】膀胱がんではPDC/PDXモデルが確立しつつある。今後更に条件を最適化するとともにこのモデルを用いた診断・治療への応用を試みる予定である。

16. 次世代シーケンサー解析（RNA-seq）に基づいたCRPC治療標的分子の同定

五島悠介（千大）

【目的】最新のゲノム手法を用いてCRPC進展機序を解明するこどを目的とした。

【方法】CRPC臨床検体に対して，次世代シーケンサーで網羅的RNA発現解析を行なった。

【結果】新規にCRPC・miRNA発現プロファイルを作成した。miR-145-3pを基点としてCRPCにおける治療標的分子の候補を複数個同定した。

【結論】癌抑制型miRNAを基点として，前立腺癌新規治療標的同定が期待できる。

17. 前立腺癌におけるスプライスバリアントを含めたすべてのアンドロゲン受容体を可視化するイメージングプローブの開発

今村有佑（千大）

【目的】新規AR阻害剤EPIを用いて，AR-Vsを含めすべてのARを可視化するSPECT用イメージングプローブを開発した。

【方法】EPIに123Iを結合させ腫瘍内ARとの結合をSPECTを用いて検討した。

【結果】123I-EPIは細胞内ARに結合しマウス用SPECTで腫瘍内ARとAR-Vsの可視化に成功した。

【結語】CRPC患者におけるARとAR-Vsの局在を知る新規プローブとしての可能性が示唆された。

18. 千葉大関連病院におけるHoLEPの現況

岡野達弥（千葉市立青葉）

HoLEP（ホルミウムレーザー前立腺核出術）は前立腺肥大症に対する低侵襲手術で，2000年代に入り本邦へ導入された。その普及現況を同門会誌の手術統計より検討した。2007年から13例に施行されたが，当初は1，2施設のみの導入に留まった。2015年には5施設で施行され，手術件数はTUR-P 474件に対し，HoLEP 186件とその比率が急増していた。本術式は既に標準手術と位置付けられており，千葉大関連病院での更なる普及に期待したい。